

幼児の観察画に見られる造形性

谷 野 正 敏

The Formative Charactor of the Observation Pictures Painted by Children

Masatoshi YANO

緒 言

N社の小学校図画工作教科書には、全学年に鉛筆やペンを使った、クロッキー教材が配当されている。クロッキーと言えば、モデルを目の前にして、観察しながら描くのであるが、一年生には、運動をしている様子を思い出して線で描こう、と書かれている。これは観察によらず、記憶に基づく作画である。この時期の児童は知っていることは描くが、見たものを見たままには描けないからだとの説による。学校行事に写生大会というのがある。全校の児童を一斉に野外に引率して風景写生をする。終了後校内展覧会を開催したり、一部を地方の展覧会に出品したりする。よく問題にされるのは、一年生の扱いである。野外学習は特に低学年に好まれるから、除外する訳にはいかない。そこで担任は現場を前にして、次のような宣言をする。さあこれからすきなものを描きなさい。建物や樹木でなくたっていいよ。お友達が絵を描いているところとか、お弁当を食べているところなんか面白そうね。見たとおりに描かなくてもいいよと。さあそれでは、どのような心構えで描くのか、ちょっととまどうことになる。

低学年児童の態度は、主観的であり、衝動的であるから生き生きした躍動感溢れるものが期待される。しかし実際はなかなか期待どおりの結果は得られず観念的になり易い。其処で見ながら描くという方法をとる。普通これは、小学校中学年以上に実施して効果を収めている。

では、このことを幼児に適用したらどうなるか。実験的な試みを行い今後の学習指導上の参考にしたい。

問 題 の 設 定

1. 幼児にものを観察させることは、感情を刺激して描画の意欲を強化することになるかどうか。
2. 観察することが、ものの構造や働きを知るでだてとなり、中身の濃い学習となるかどうか。
3. 観察するものの形や構造に束縛されて、率直な感情や意志の造形的表現が阻害され、画一化されることはないか。

以上の三点であるが、主となる目標は2である。1は調査時の幼児の行動に見られるし、又作品の分析によっても知られる。3は作画の構図・描法・色彩構成等から判断される。いずれにしても、2と深くかかわりあっている。

調 査 の 方 法

1. 対 象 児

名古屋女子大学付属幼稚園児 表1

2. 調査月日
昭和57年3月、都合により各クラス毎に、1ヶ月の間の適当な期日に実施する。

3. 問題提示
「自分のランドセルを見て、パスで画用紙に描きなさい。」画用紙は27×38cmの規格品。

4. その他

(1) ランドセルは、各自所有のもので園指定の規格品である。蓋に大学の頭文字「名」と「幼」とを図案化した園マークが黄色でつけられている。全体の形・大きさ・構造等すべて同様で、その中には登園時のままのお便りばさみ・出席ノート・ティッシュペーパー等が収められている。ランドセルの外部側面、胴締と称する帯紐には、識別と装飾を目的とした鈴や、人形がついているものもある。これをマスコット人形等と呼ぶ。ここだけが他との相違点である。ランドセルを選定した理由は、親近感があることと、色彩形態ともに同一品であることによる。

(2) 用具として、個人持ちのパスにした理由は、表現上の抵抗を少なくすることと、色調上の年令差や個人差も研究の対象としたいからである。その他の用具の使用はさけた。表現技法が複雑化して、研究の意図が不明確化するからである。

(3) 描画に先立って、よく見て描きなさい、形や色をよく見なさい等の条件づけはやらない。調査者の言動が微妙に影響して、等質の資料が得られぬと予想したからである。

(4) ランドセルは、机の上に持ってきてもよく、棚にあるままでもよい。なるべくふだんの心的環境下で描写させるためである。

結果の処理

ランドセルの構造や部品は、図1に示したようにA～Kまでの11ヶ所である。まずこの器物の形が描かれていない錯画を0とする。次に形だけがあるようなものを1とする。肩紐とか園マーク等が加われば、2とか3とかの数値とし、最高は11である。また形の明瞭・不明瞭は別問題とする。

また、観察して描かれるとは言っても、毎日使っているから、かなりのことは知っていると思う。この知っていることと、今観察してみても知ったこととを分離測定することは、幼児であるから困難かと思う。従って作品は両者が混合された形で現われることを含みとする。

なお、個人差の問題があるが、造形活動に付随することであるから、必要に応じて考察の対象としたい。

表1 調査人員

年 令	性 別	男	女	合 計
		3歳	つくし	10
	ちゅうりっぷ	10	13	23
	合 計	20	27	47
4歳	ひまわり	12	15	27
	き く	11	17	28
	たんぼぼ	15	18	33
	すみれ	13	16	29
	合 計	51	66	117
5歳	松	17	19	36
	竹	12	14	26
	梅	16	16	32
	桜	18	15	33
	合 計	63	64	127
	総 計	134	157	291

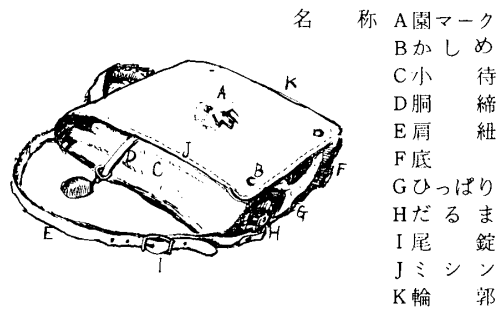


図 1

考 察

1. 観察画の年齢別比較

(1) 3才児

まず問題の錯画であるが、3才児に5例・5才児に1例がある。(表2の0欄参照)このみ

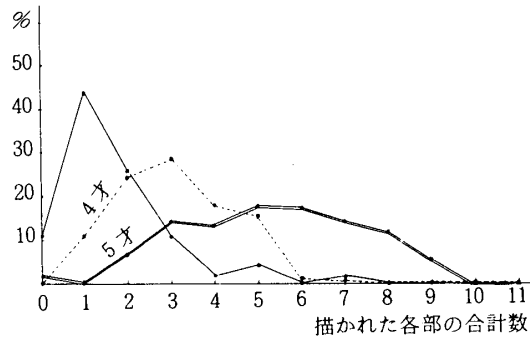


図2 合計数別・年齢別百分率

表2 合計数別累計

年齢性別	3才				4才				5才				合計				
	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	
画面に描かれた各部の合計数	0	2	3	5	10.64						1	1	0.79	2	4	6	2.06
	1	13	8	21	44.68	4	8	12	10.26					17	16	33	11.34
	2	4	8	12	25.53	16	13	29	24.79	7	1	8	6.30	27	22	49	16.84
	3	1	4	5	10.64	14	19	33	28.21	13	5	18	14.17	28	28	56	19.24
	4		1	1	2.13	11	11	22	18.80	12	5	17	13.39	23	17	40	13.75
	5		2	2	4.26	6	12	18	15.38	9	13	22	17.32	15	27	42	14.43
	6						2	2	1.71	9	13	22	17.32	9	15	24	8.25
	7		1	1	2.13		1	1	0.85	6	13	19	14.96	6	15	21	7.22
	8									5	8	13	10.24	5	8	13	4.47
	9									2	5	7	5.51	2	5	7	2.41
	10																
	11																
合計人	20	27	47		51	66	117		63	64	127		134	157	291		

の色を使った直線や曲線のぬたくりである。ランドセルらしい輪郭はまったく認められず色彩からも予測しがたい。自由で多彩、わだかまりがない。(図3)

次に最も事例の多いものが、それらしい形を描いて色を埋めるという形式のもので、(その逆もありそうだ)21例44.6%である。技法はまちまちで、重ね塗りもあれば並べ塗りもある。中には12色を次々と使用した重ね塗りをしたものもある。これに渦巻状の曲線を重ね、中心部は極めて複雑な色調となり、実に逞しい造形作品となり光彩を放っている。(図4)次に目立つ作品の一つは、数多いパスを塗り並べたという装飾性の強いもので、碁盤のように紙面を区切り、その区切った中にこのみの色を塗っている。長方形をしているの

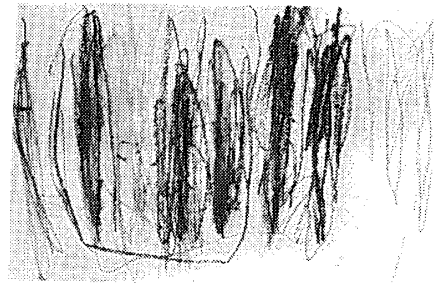
は、ランドセルの形かも知れない。(図5)かような装飾性の強い作品は、数多くみられた。

錯画の初期は点線や破線をうつ活動である。ここではその作例は見当らなかった。既にその時期を通過した年齢かも知れない。しかし技法としての点線や破線は、ランドセルの蓋のミシンや肩紐の尾錠穴に描かれている。

次にランドセルらしい形を描いて、園マーク(17名36.2% 表3)と肩紐(25名53.2%)を加えたものが出てくるが、それらの合計は、91.5%である。要するに3才児のランドセルは、園マークと肩紐が描かれた作品なのである。

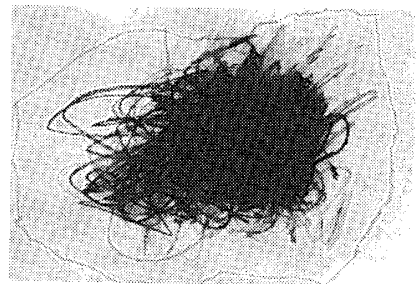
ピアジェによれば⁹⁾2才以後図形を読みとる力、すなわち図形から実在のものを思い浮べることが可能となる。従って自分の描いた「なぐりがき」の図形に名前をつける。とあるが、その言葉を借りれば名前をつけたものの数は多くない。例えば園マークと肩紐の他に尾錠の止め穴を描くとかである。(図6)

またピアジェは⁹⁾3才以後になると、鋏を使う。ボタンをかける。円や正方形がかける。頭足人が現れる。粘土でいろいろなものがつくれる。象徴能力の発達によって、「ごっこ遊び」ができる。



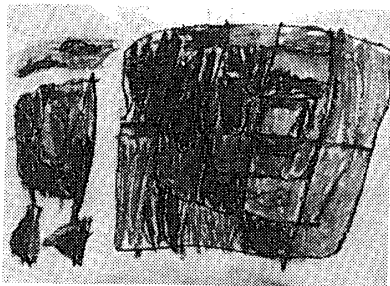
S.K. 女 3才

図 3



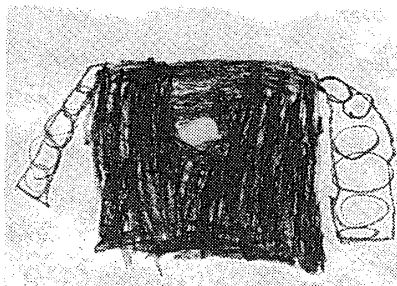
H.S. 男 3才

図 4



A.W. 男 3才

図 5



H.U. 女 3才

図 6

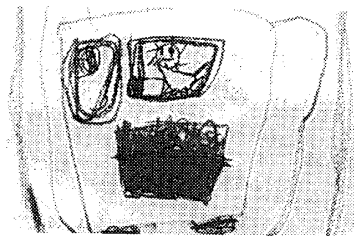


図7のA

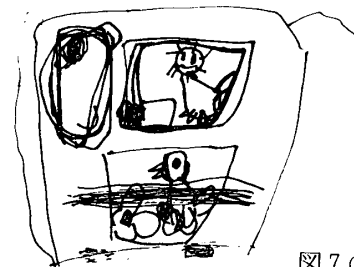


図7のB

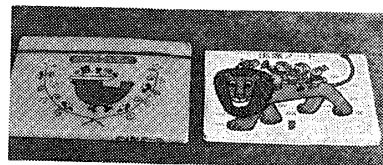
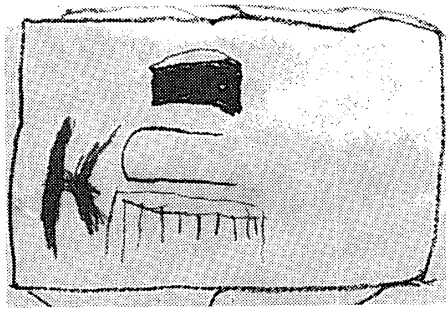


図7のC



T.N. 男 3才

図 8

とも言っている。生後間もない頃の目と手の共応の働きは、この期になるとかなり完全なものとなり、感情や意志を外化する機能が急速に発達するように考えられる。

図7及び図8はいずれもレントゲン描法で、前者は図式時代に入る直前の頃（4、5才～6才・ピアジュ説）の作例で、後者は記号による表現で、前図式時代（3、5才～4、5才・ピアジュ説）かと考えられる。比較してみると興味深い。レントゲン描法の絵は、3才児に限り男4、女2計6例だけであった。

図9は、前図式期の作例で太陽が描かれていることと、人物が頭足人でない点が注目される。頭足人で無いことは、ピアジュの説よりも進んでいることになる。但しこの人形のようなものは、自分を描いたのか、それともランドセルのマスコットか判断しにくい。マスコットとすれば位置がまずいから、自分又は誰か友達でも描いたと考えたい。

太陽を描くことは、幼児には珍しいことでは無い。いもほり・えんそく等の生活画には、晴雨に関係なく出現するし、この作例の如く静物画に属するものにまで描かれることもある。有史以来人類は太陽・水・空気の恩恵により生命を維持して来たこと、換言すれば太陽が人類の歴史を作ったことを思えば、幼児の絵に常に登場するのは当然かも知れないが、もっと科学的に理論づけされてもよさそうである。ただこれは知的リアリズムの時代にのみ見られる傾向で、次の客観的表現の時期になると完全に姿を消す。

図10はランドセルが幾つも描かれた作例である。中央の最も大きいものが、形も内容もしっかりしているから初筆であろう。次に右上を描いたようだ。その先はどこに移ったか判然としない。画用紙いっぱいにダイナミックなリズム感を覚える。左上の長方形は、描き損じかと思われる。

図11は極めて類例の少ない作品である。太く長いランドセルの右方には、マスコット人形があり、左に延びたバンド（小待）には、本人の氏名を書いたカードがつけられている。調査した付幼のランドセルは、すべて同形だから他と区別する為にも、マスコットとカードがものを言う。特にカードを強調したのはその為かと思う。右上の塊は描きまちがいである。

図12は、絵の他に習い覚えた文字を加えて意志表示をした例である。Y君はクラスの象徴的存在で、作者K君とは最も心理的緊密度の強い関係にある。つまり気弱なK君は、力

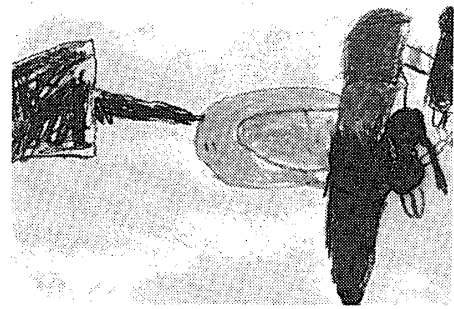
表3 各部名称別・年令別累計

年令	性別	各部名称											
		輪郭	園マーク	かしめ	ミシン	小待	胴締	肩紐	尾錠	底	ひっぱり	だるま	不明
3	男	7	6	1			1	7				1	3
	女	3	11	4		2	1	18	1	2	6	7	3
	計	10	17	5		2	2	25	1	2	6	8	6
4	男		47	16	1	9	5	42	5	2	14	10	
	女	1	58	31	1	11	14	57	5	5	13	20	
	計	1	105	47	2	20	19	99	10	7	27	30	
5	男		61	50	6	20	30	52	16	11	20	34	
	女		61	53	19	33	42	46	14	28	43	41	1
	計		122	103	25	53	72	98	30	39	63	75	1
男		7	114	67	7	29	36	101	21	13	34	45	3
女		4	130	88	20	46	57	121	20	35	62	68	4
合計		11	244	155	27	75	93	222	41	48	96	113	7



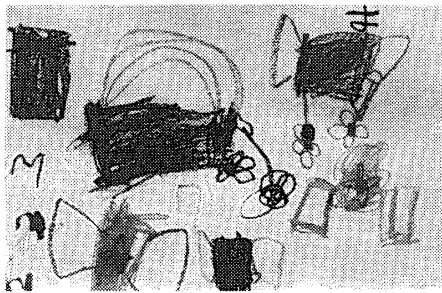
S.M. 女 3才

図 9



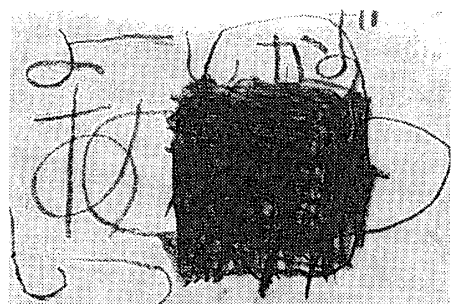
Y.M. 女 3才

図 11



I.A. 女 3才

図 10



K.A. 男 3才

図 12

が強くみんなに慕われているY君にあこがれているのである。

さて、相当数の作例を見てきたが、3才児の作品の傾向として、第一に表現が多様であること。第二に錯画期から象徴期・前図式期を経て、図式期の直前までを含む精神年齢の幅の広さがあること。この二点の特徴があげられる。

ローエンフェルドは、この期の教育について次のように、親の質問に答える形式で論じている。⁸⁾ふつう子供は、二つでなぐりがき（錯画…筆者註）を始めますが、これも人間のほかの発達と同じく、個人個人で違います。ある子供は一つ半でなぐりがきを始めます。といってその子が天才というわけではありません。同じように二つ半で遅れているのでもありません。なぐりがきは、平均して二つか三つ、四つまでの子供がやります。三つと四つの間で自分のいたずら書に名前をつけます。三つにならないうちに何か分るものを描く子供は、成長が早いというわけだが、それが必ずしも子供の為になるとは限りません。この進歩が、子供に動作の自信を失わせ、また子供のいきいきした経験をうばってしまうなら、子供の成長に明らかに有害です。

(2) 4 才 児

4才児になると園マーク・肩紐以外にだるまや、かしめも加えられる。一枚の絵に2～4種描かれるものが多く、84名71.8%を占める。(表2・表3)外形は一見してそれと分かり、肩紐も観察による知的把握がされている。細部のない塊的描写でも、ランドセルの特徴となる外形をとらえ象徴期とは異質である。

肩紐を描いた数は3才児では25名53.2%であった。それが4才児になると95名84.6%と急増し、記号的表現から写実的表現へ移行がはじまる。(図13)

園マークも同傾向である。3才17名36.2%に対し4才では105名89.7%と急増する。

次に園マークの不部両端にかしめと称する金具がある。機能としては、幼児の関心をひくものでは無いが、4才児に40.0%も見られる。3才児には5名にのみ見られたから、その差は大きい。

以上の事例から4才児は、かなり注意深く観察し、知的、感覚的に把握した事象を、かなり詳細に描写することができる。

しかし3才児に見られた表現の多様性は認められない。観察により理解されたランドセルの機能とか、形態とかを率直に見たままを表現しようとするから、作画は結果として画一化されやすい。

(3) 5才児

画面に多くの部品や部分が描かれることは、表2によっても明瞭である。錯画が一例あるがそれは特例として、最低2～9までの幅がある。(表3・図2)この幅は、3才児のそれと異なり、知り得た事実をまんべんなく描こうとする。知覚された事実を自己の意志や感覚で濾過するが、あまり取捨せず濾紙を通過させる。また手先の運動と意志とのコントロールが進み詳細な表現が可能となる。

さて細部について考察しよう。園マークは122名96.8%となり殆どの幼児に描かれている。園生活は幼児にとり学校教育のスタートであり、しかも付属幼稚園に在園することは誇りでもあり喜びでもある。園マークを忘れないのは、そんな心象を象徴しているかも知れない。

続いて頻出度の高いものを順に挙げると、かしめ103名79.8%、肩紐98名77.1%となり次がだるまで75名59.0%と続く。だるまは図1に示したように、肩紐がランドセル本体に接続される部分の金具である。機能的にも重要な部分で、肩の掛けおろしに最も力が加わり破損しやすい部分である。金具そのものも複雑な形で、正確に描こうにも仲々つらい部分である。静物のモデルとして扱う大人の思考からすれば、興味ある部分である。予想ではもっと描かれてもよいと考えたが、そうではなかった。それと似たことが、尾錠に就いても言える。成人と幼児の感覚の相違とでも言えようか。

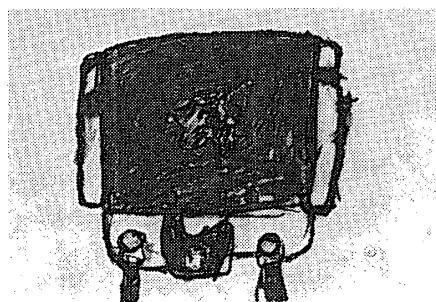
次にひっぱりと言う部分がある。ランドセルの蓋をとめる部分で、マジック形式であるから、上部から押すだけでよい。椿の花弁のような形で、大きさも同じ位である。縁にミシンがかけてある。図14はそれらの細部をよく描写している。

図15は、机上に置かれたものを横から見て写生したような作品である。ようなど述べたことには、理由がある。それは客観的な描写のようだが、実はそうではないということである。ランドセルの底の部分が線で描かれている。面が線に見えるのは、目の高さに限ら



Y.U 女 4才

図 13



S.S 女 5才

図 14

れるから底の部分が目の高さである。そうであれば、マスコットの紐が下に延びてはいけ
ないし、マスコットそのものも、もっと上方
にこななければいけない。やはり知的レアリズ
ムの時代の絵ということになる。

では何故このような表現法をとったのか。
作者が描きたかったものは、ランドセルの形
や構造ではなくて、しっかりと胴締につけら
れたマスコットであろう。毎日の園生活に最
も大切なランドセル、その要となるものが、この部分なのである。更に注目したいものが、
左方に描かれた肩紐である。都合で画面の片隅になったが、パスで塗りこんだ強さと、筆
使いの注意深さが巧みに紐の厚さと柔軟性を表現している。毎日肩に掛けても切れること
はない。作者の意志や感情が単的に表現されている。なお色彩であるが、蓋と肩紐・胴締
及び背中にふれる部分が単色の茶色である。背中の上部の稍薄い色と、肩紐のつけねのだ
るまに相当する所が黄色である。濃い紐は紫色で、その先にある丸い鈴かと思われるもの
はピンクである。胴締からもう一つさげられた氏名カードは、輪郭が薄いピンクで亀甲の
形は、黄色と白が使われている。弓形をした蓋の茶色の下部に沿って黒が塗ってあるが、
実物に無い色だから蔭をつけたのか。その他の部分は実物の色が予想できる。色彩も単純
で明解である。

さて、個人の作品を鑑賞した結果になったが、これは作者の意図が整理された技法で明
確に表現された代表的な一例である。画面を整理純粋化して自己主張をする現代芸術とど
こか似ているような気がする。子供に教えられるとは、このようなことだと思ふ。

2. 園マークと発達の段階

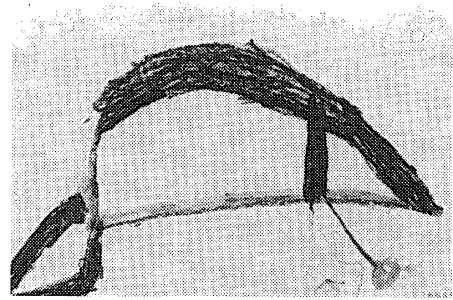
園マークはデザイン化された「名」と「幼」の二字から成る。この期の頃、知識欲が旺盛で、
習い覚えた文字を盛んに書いて喜ぶ。園マークもその意味で興味を持ったと思われる。3才
児の34%が描いているが、それらしく判読できるのは3名だけであった。4才児では、88%、
そのうち47%は読めるものであった。飛躍的な伸び率である。5才児では96.8%そのうちの77%
が読めるものであった。

また4才児と5才児には、幼の一字しか読めないものが多く、5才児では49.6%もあった。
これはデザインされた「名」が極めて小文字であり、忠実な描写をすると点のように描かれる
からである。

次に偏と旁とが左右入れかわったり、上下に移
動したりしたものが、3才児に2例、4才児に11
例認められた。幼の偏と旁、それに名という小字
字及び囲み模様の四つのユニットが、からみ合っ
て、複雑なデザインとなっている。正に香り高い
芸術と言いたいほどである。我々の先祖は、獣皮
や亀甲に文字を刻したと言うが、その甲骨文にも
どこか共通する字形である。(図16)

3. ランドセルの側面描写

調査した幼児の絵は、3例を除き全部正面向き



N.T 女 5才

図 15



T.K 女 4才

図 16

であった。3例とは図11・図16等である。この場合側面、つまり小待部分は、どのように描写されているのか。又底の部分はどうか等を考察したい。

3才児には、2例あった。小待部分を黄色く塗っているからである。実物のその部分は、黄色ではないが、明るい色をしていて他の部分とは違った色彩である。4才児では31名26.7%と急増する。5才児では54名42.2%と更に増加する。3才と4才の開きはここでも大きい。描法として正しい遠近法によるものは、一名も無かった。しかし小待のいずれか一ヶ所と底とを描き、角の部分は斜線が引いてあるものがあった。これはかなり進歩した描法である。

正方形を描いて四隅から放射状に線を引く。これはよくある展開図法に似た机の描き方だが、その描法がランドセルにも見られる。小待と底の境界は、直角に切除されたように描かれる。図15がそれである。空箱を切り開いたようなものである。比較的このようなものは多かった。小学校低学年に見られる描法で知的リアリズム時代と呼称される実例として、よく紹介される。

また低面だけを取ってつけたように描いたものもあったが、ひっぱりやだるま等の部品を描きたくて、その周囲の形にも気付いたと思われる。客観的な描写へ一歩を進めたことは事実である。

4. 色彩の構成

4才児と5才児の色彩の主演は茶色である。これはモデルの色そのものである。厳密に言えば、モデルは朱勝ちの茶色である。混色して本物の色に接近しようと努力したものは、皆無であった。パスの中の茶色単色である。園マークは、大部分の絵が黄色で、たまには稍色の濃い橙色又はピンク・白等が使われていた。緑や紫もあったが例外である。小待とミシンの部分にも黄色を使っていたが、黄土色も時に見受けられた。いずれもモデルに近似する色彩である。

このことから、幼児の表現態度は、かなり対象に迫ろうという姿勢があると見てよい。

ところが3才児になると、様相は一変する。まず茶色であるが、殆んど見当たらない。本稿の頭初で、色彩は多彩、自由にして奔放、しかも装飾性が強いと述べたが、正にそのとおりである。

3才児は自己中心の色彩である。従って観察させても、あまり意味がないかも知れない。だが4才5才児はそうではない。もっと物をしっかり見させる教育が意図的に行なわれてもよいと思われる。

結 語

本稿では、幼稚園児の持ち物として、最も親近感のあるランドセルを観察して絵を描かせた。調査の直接の目的は各部の構造や部品等が、どのように描写されるかであった。それを分析することによって、観察して描くという方法が幼児教育に適切かどうかを問題とした。

- (1) 3才児は、錯画期・象徴期・前図式期から図式期直前までの描画を見た。傾向は、観察した対象にとらわれることなく、自己中心的であった。
- (2) 4才児から5才児へ内容の進歩はあるけれども、観察態度・表現傾向に差が少ないと思われる。
- (3) 表現意欲に就いては、質の差こそあれ各年令とも、かなり密度が濃い。
- (4) 画一化の問題に就いては、4才児5才児の色調の例でもわかるとおり、稍その心配が無いでもない。しかし物の形態構造は、かなり感知され、独自の技法による描写をしている。

そのことは、主体的活動を活発化しつつあることの証左である。

観察して描くという学習方法は、以上のことから、今後幼児の絵画教育に積極的に導入され

てよいと判断する。

この研究に重要な資料となった、幼稚園児の作品は、すべて付属幼稚園の諸先生のご指導によるものである。厚く感謝の意を述べてまとめとする。

参 考 文 献

- 1) 教育美術振興会：教育美術, 41・13, 12月号(1980)
- 2) " : " , 43・5, 4月号(1982)
- 3) " : " , 43・10, 9月号(1982)
- 4) 美育文化協会：美育文化, 21・10, 10月号(1971)
- 5) " : " , 22・1, 1月号(1972)
- 6) " : " , 25・2, 2月号(1975)
- 7) 波多野完治：ピアジェの認識心理学, 国土社(1981)
- 8) ローエンフェルド著 勝見 勝訳：両親と先生への手引, 115, 白揚社(1980)
- 9) 花篤 実・岡 一夫：絵画製作・造形理論編, 13, 三晃書房(1982)